



Title	オスカー・ワイルドにおける PURPLE の意味
Author(s)	山田, 勝
Citation	Osaka Literary Review. 1970, 9, p. 135-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

オスカー・ワイルドにおける

PURPLE の意味

山 田 勝

(序)

purple の意味について O. E. D. を調べてみると大体次の点がその意味の中心となっている。

1. 皇帝，国王等の衣裳ならびにその地位の象徴。
2. 豪華な葬儀ならびに悲しみの象徴。
3. 豪華絢爛，陽気，けばけばしさ等の象徴。

しかし以上の意味するところは要すに 'royal' の一語に帰結するのではないかと思える。

ところで世紀末という時代，そして印象主義，唯美主義の時代の芸術は色彩を無視した上ではなり立たないことは以前にも述べた。¹ 表面的にせよ内面的にせよ，意味の伝達に色彩語を使用したことが非常に多かった。つまり一種の大流行を来たしていたのである。特にオスカー・ワイルドは若い頃から晩年に至るまで，あらゆる表現形式において色彩というものをたえず重要視し，文字で表わす表現形式については色彩語を至るところで駆使し，そうでないもの，つまり実生活においても色彩効果を十分に応用していた。私は以前 yellow についてのワイルドの見解を調査したが，この色はワイルドに限らず当時の象徴色であつたことは周知である。ところが今回の purple は前者ほど一般的ではなく，いうなれば彼の個性から生じたものであり彼独自の芸術観と密接な関連を持つと言える。繰り返して言えば，この色は彼の大変なお気に入りの色であって，彼の芸術の真髄をこの色に象徴させているということなのである。又，上で引用した O. E. D. の説明とは離れた(この大辞典にはワイルドの作品引用は避けられている)

意味も多分にある。この意味においても purple の研究はそれほど無意味とは思えないし、世紀末芸術の盲点である唯美主義と色彩の関連性、そしてワイルドの芸術観の本質を究明する一手段としても十分意義あるものと信じている次第である。

(一) ワイルドの好きな色であったところについて

ワイルドは1877年7月19日 (Postmark) 友人 Willam Ward に彼の当時の滞在地 Merron Square North へ招待の手紙を出している。その招待の理由として当地にこれだけの楽しみがあるとして次のような条件を挙げている。²

... You will have

(1) bed

(2) table and chair

(3) knife and fork

(4) fishing

(5) scenery—sunsets—bathing—heather—mountains—lakes

(6) whisky and salmon to eat.

生活必需品と娯楽は別として景色のすばらしさのうち sunsets を特筆している。英国の夕暮は色々の色彩を持つというから断定するわけにはいかないがワーズワースの *Evening Walk* などの詩から判断できるように purple がその代表的な色彩であると云えるし、ワイルド自身も夕暮の美をこの色でたとえている例はよく見受けられる。まずこういった彼の景色に対する趣味を前提として話を進めていきたい。彼が自然の美と関連してこの色を好んだ点をもう少し具体的に述べてみよう。1882年3月27日 Norman Forbes-Robertson に宛てた手紙に次のように記されている。³

..... from the chill winter of the mountains down into eternal summer here, groves of orange trees in fruit and flower, green fields, and purple hills, a very Italy, without its art.

又彼にとってこの色が精神的安らぎと快感を覚えることも次の手紙⁴から推測されるであろう。

My dear Meynell, I am far away from the Athenaeum in the midst of purple heather and silver mist — such a relief to me, Celt as I am, from the wearisome green of England.

このように purple は彼の好きな色であり、彼の唯美理論の裏づけとなる要素の一つであるわけであるが、彼一流の話術から次第にこの語一つによってあらゆる世紀末的美意織（これについては後述する）を総括・象徴させるまでに至っている。例えば 1893年 2月23日（Postmark）Campbell Dodgson への手紙⁵に次のように書かれてある。

.... I look foward to seeing you in town, either guarding marvellous Rembrandt etchings, or simply existing beautifully, which is even better, and we must talk of purple things and drink of purple wine.

この手紙にみられる ‘purple things’ は紫色をしているものや、紫色の美についての議論をしようというのではなく、*Daily Chronic*⁶（1905年 5月19日）的なゴージャスだけの意味ではなく、ワイルドの世紀末的芸術論まで及んでいることが理解できよう。ロバート・ロスがレディング獄

舎からワイルドが出た時の模様を

He enjoyed the trees and the grass and country scents and sounds in a way I had never known him do before, just as a streetbred child might enjoy them on his first day in the country : but of course there was an adjective for everything — “monstrous”, “purple,” “grotesque,” “gorgeous,” “curious,” “wonderful.”

と書いているが[?]、その時彼が最もよく使用した形容詞のうち “purple” を挙げていることからこの項の主旨がよく理解されると思う。

それでは次に好きな色であるこの purple を彼の生活にどれだけ応用したかについて少々触れたい。『ドリアン・グレイの肖像画』は完全なるイマジネーションの傑出であるが、その中に登場する人場は極めて具体性を有している。ヘンリー卿やバジル・ホールワードの言葉はワイルドの代弁であり、その他の会話のやりとりも彼が実際の社交場でおこなったものが再現されていると云われている。又室内装飾や調度品、食事などの日常生活の道具立てに至っては彼の理想と現実がそのまま表現されているとみてさしつかえない。従ってこの作品から三つほど例を挙げておきたい。

Her white feet trod the huge press at which wise Omar sits, till the seething grape-juice rose round her bare limbs in waves of purple bubbles, ... (chap. 3)

He took up from the couch the great purple-and-gold texture that covered it, and, holding it in his hands, passed behind the screen. (Chap. 10)

.... Upon the walls of the lonely locked room where he had spent so much of his boyhood, he had hung with his own hands the terrible portrait whose changing features showed him the real degradation of his life, and in front of it had draped the purple-and-gold pall as a curtain. (Chap. 11)

『ドリアン・グレイの肖像画』だけに限定しても多数このような例が見出され、又彼が室内装飾等について述べた論文にこのような例が多くある。いずれにしても彼は実生活においてこの色を多用しているのである。

purple がワイルドの生理的に、芸術的に、又世紀末的意識から好んだ色であり、又実際の生活に応用していた色であるという前置きをした上でその芸術的分析を細部に渡って考えて行きたい。

(二) 王室の貴族的要素

purple が royal を象徴することについてはすでに序で述べたとうりである。ワイルドの作品にもこの意味で使用されていることが非常に多い。*La Saint Courtisane or The Woman Covered with Jewels* の冒頭にこの事実を証拠づける箇所があるから引用したい。

First man: Who is she? She makes me afraid.

She has a purple cloak and her hair is like threads of gold.

I think she must be the daughter of the Emperor. I have heard the boatmen say that the Emperor has a daughter who wears a cloak of purple.

ワイルドは若い頃から貴族又は王室の高貴な血統を崇拝していた。その理由の一つとして次のことが云えると思う。19世紀の中頃から急速に勢力を

持ちはじめたブルジョワ階級が貴族たちの栄光を奪い始めた。そしてこの中産階級たちは自分たちの成り上りに対する世間の非難を避ける為に、自から厳しい道徳律をつくり、いわゆるヴィクトリア朝道徳を築いたのである。しかしそれは偽善にみち、色彩に欠け、陰うつなものであった。その上なによりもよくないのは彼等の人生観があまりに卑俗⁸であったことである。ワイルドを中心とする世紀末の芸術家たちのプロパガンダの一つはヴィクトリア朝道徳を破壊することであったけれども、これは無闇に伝統を破壊し、無思想的に新しいものだけを追い求めるというのではなく、過去の優華な美を尊重しつつ、新しい世界観と新しい美学を打ち立てようとしていたのである。いわゆるニュー・ヘレニズムへの傾倒であった。成り上りの、そして卑俗なブルジョワ的、ジャーナリズム的伝統よりも、古きよき時代の美と色彩と気品を受け継いでいる貴族と王室へのワイルドの憧れは強かったことは確かである。自滅の原因となった男色事件の相手であるアルフレッド・ダグラスがあればほどまでに彼を惹きつけたのは単にワイルドのそういった本能とダグラスの肉体上の美によるものだけではなく、ダグラスが古い伝統を持つ侯爵の家に生れていたからでもあった。⁹又、ワイルドの作品に登場する人物のほとんどが貴族の社会を舞台にしていることから彼の royal 好きがよく理解できるのである。そういった社会からのみ彼の美観を世に示し、当代の卑俗さを皮肉ることができたのである。いずれにしても彼の好む royal の象徴色が purple であり、しかもこの色が彼の本来好む色であった。いうなれば意識的かつ無意識的にこの色への崇拜の条件が備わっていたのである。

それでは royal を象徴するこの色の美は一体どのようなものであるかについて考えてみたい。これは王室ならびに貴族の生活は前にも触れたとうり伝統と豪華と威厳に満ちていることから、ワイルドもこの色に以上の要素を含入させていることが多い。

O much-loved city! I have wandered far
 From the wave-circled islands of my home;
 Have seen the gloomy mystery of the Dome
 Rise slowly from the drear Campagna's way,
 Clothed in the royal purple of the day:¹⁰

* * * * *

Adieu, Ravenna! but a year ago,
 I stood and watched the crimson sunset glow
 From the lone chapel on thy marshy plain:
 The sky was as a shield that caught the stain
 Of blood and battle from the dying sun,
 And in the west the circling clouds had spun
 A royal robe, which some great God might wear,
 While into ocean-seas of purple air
 Sank the gold galley of the Lord of Light.¹¹

『ラベンナ』という詩はワイルドがオクスフォード在学中古代の町ラベンナを訪れ、その美しさに深く感銘して書いたものであるが、上記の引用からも判断できるように彼の 'royal' はほとんどと言ってよいほど古代の王制を示すものであって、彼の同時代の王室又はそれに関係するものを指すことは少い。(特に詩についてはそう断定してよいが、ただ彼の「風俗喜劇」はその性質上同時代の貴族を登場させないわけにはいかないのである。)古代ギリシャ・ローマ時代への憧憬、つまりヘレニズム的な王室の美を purple に表わしているのである。言い換えれば現実からは遠いものへのロマンティックな美でもある。purple にロマンティシズムを漂よわせていることは童話の世界についても同様のことが言える。童話とは一般的に「いつ、どこで」という正確な時代や場所が判定できないことが多い

が、いずれにしても身近かな地域や時代を扱かうものではない。童話とは本来ユートピア文学の部類に属すからである。たとえ古代ギリシャ・ローマでなくとも何かオリエント的雰囲気を持っているのが常である。そしていわゆる「王子様、お姫様」が登場するものである。しかも彼等も純然たる王室の人々なのである。遠いものへの憧れと王室へのそれが、現実への風刺と見事に融合して生れたのが彼の童話でもある。その例を少し紹介したい。

Therefore go back to thy Palace and put on thy purple and fine
linen.¹²

..., she walked slowly down the steps towards a long pavilion
of purple silk that had been erected at the end of the garden,¹³...

When the three days were over the marriage was celebrated.
It was a magnificent ceremony, and the bride and bridegroom
walked hand in hand under a canopy of purple velvet embroidered
with little pearls.¹⁴

結論として purple の象徴する王室はヘレニズム的かつローマン的な世界におけるそれであることが理解できる。

(三) ヘレニズムならびに宗教的要素

前項において purple の美はヘレニズムとロマンティシズムに通じることはすでに述べた。それは古都ラベンナを詩った詩から十分伺うことができる。この項ではその補足的説明であることをおことわりしておく。

ワイルドが *De Profundis* において自分の生涯で二つの大きな転換期

があったが、それは自分がオクスフォード大学に入った時と、牢獄に入った時であるという意味のことを語っている。彼が芸術家、特にその時代の流行である唯美主義者になった理由は色々あろうが、大学時代マハフィー教授¹⁵と共にギリシャ地方に旅行し、古代の都市の美しさに触れ、深く感銘したことがその大きな理由の一つであることはよく知られている。極論すればギリシャを中心とする古都巡歴がなければ唯美主義者ワイルドは存在しなかったと言える。全盛時代のワイルドは劇や小説や評論を中心とする創作をしていたが、初期の頃はむしろ詩が主であった。そしてその詩は彼の敬愛するキーツ、その他のロマンティシズムの詩人の流儀を似ることが多かったとは言え、ギリシャ・ローマ時代の神話を交じえて愛と自然美をテーマにした種々の詩を独自に創作していた。その詩には今述べたようにギリシャ・ローマ神話の名称や古代の地名が多用され、それらの優美かつ華麗な美をよく purple に象徴させているのである。その例を二三挙げたい。

....And wandering through the tangled pines
 That break the gold of Arno's stream
 To see the purple mist and gleam
 Of morning on the Apennines.

When, bright with purple and with gold,
 Come priest and holy Cardinal,
 And borne above the heads of all
 The gentle Shepherd of the Fold.¹⁶

O lone Ravenna! many a tale is told
 Of thy great glories in the days of old:

.

Discrowned by man, deserted by the sea,
 Thou sleepest, rocked in lonely misery!
 No longer now upon thy swelling tide,
 Pine-forest-like, thy myriad galleys ride!
 For where the brass-beaked ships were wont to float,
 The weary shepherd pipes his mournful note;
 And the white sheep are free to come and go
 Where Adria's purple waters used to flow.¹⁷

All subtle arts belonged to him also. He held the gem
 against the revolving disk, and the amethyst became the purple
 couch for Adonis, and across the veined sardonyx sped Artemis
 with her hounds.¹⁸...

さて以上の詩からでもわかるように単にギリシャ・ローマ時代のヘレニズム的美のみならず、宗教的な色彩さえ感じ取ることができる。一般的世紀末芸術家たちの思想は反宗教的であり、非道徳であるということになっており、事実そのとうりである。しかしこれは何度も言っているとうり、当時の教会（それは多分にブルジョワ階級との結びつきを強くする）ならばそれが強制する色彩のない道徳律に対する反撓にすぎない。反道徳はある意味において神又は宗教の本質をよく理解しているからこそ生じる現象である。偽善の宗教への不満のあらわれに他ならない。ワイルドも非道徳の汚名は着せられたけれど、彼の心に流れる宗教的美しさは童話の世界を持ち出すまでもなく、容易に見出されるし、一連のヘレニズム調の詩にもそれがよく理解されよう。彼の言う宗教は色彩と想像力に富み、自由奔放のロマンスを感じさせる、極めて人間らしい神を有する宗教なのだ。そし

て purple にこの意味を持たせたのである。しかし purple と宗教性については後に再考したい。

(四) 頽廃の美と脊徳

前項において purple の表わすヘレニズムの中に宗教的要素が存在すると言った。とすればこの項における「頽廃と背徳」というタイトルは神の概念と矛盾することになる。しかしこれは終局的には矛盾しないのである。というのは、ワイルドの言う神ないし宗教は古代の自由奔放な、極めてヒューマニスティックなそれであって、強制され、組織化されたものでは決してないのである。当然のことであるが本質的な宗教というものは各個人の人生観に存在するのであって、決して他人から強制されるものであってはならない。自由のないところに真の宗教はあり得ないのであって、言い換えれば生の喜びもない。ワイルドは世紀末唯美主義者の代表者ということになっているが、彼の美の概念を総括すれば「快樂」又は「生の喜び」なのである。快樂は美であり、美は快樂である。自由を束縛され、体型化され偽善化された英国道徳と教會的宗教から快樂を得ることは不可能である。従ってそういった宗教体制の中には美もなければ真の宗教も存在しないと彼は考えるのである。ルネッサンスが中世のマンネリ化した教会を中心とする非人間的世界観に反撓し、ヒューマニズムと色彩をギリシャ・ローマの文化に求めたように、ワイルドの態度にも同様のことが言えるのである。言葉を換えれば彼はニュー・ルネッサンスの人なのである。その意味において彼が背徳者の汚名を着せられてはいるが、宗教の本質をよく理解し、その喜びを知っていたのである。背徳者は無神論者と異なり、神をよく知っている人である。ただ、普通の信者のように教會の正門をくぐらないだけだ。パラドックスとは物事を正面から取り組まずに、側面から入り、そしてその真理を獲得するのと似ている。ワイルドがパラドックスの名手であった事実と背徳者であった事実がこの点においても一

致するのは興味深い。

以上の如きワイルドの美観、人生観、倫理観を前提とすれば、ヘレニズムならびに宗教性を帯びているという第三項のテーマは必然的にこの第四項の主題に通じるのである。何事においても革新もしくは進化を急速に行なうとすれば、そこにならず行き過ぎが生じる。ワイルドの行き過ぎはあまりにも自己主張が強すぎたことである。自己主張をただ単に作品という形体に表わすだけならば、それほどすさまじさを生み出しはしない。しかし彼は人生というものを一つの表現形式と考え、その中に自己の芸術を如実に表現した。その結果必要以上に背徳者の汚名を着ることになったのである。芸術に表わすテーマを実際の生活に応用するとすれば、その訴える力は単なる作品の主張とくらべものにならないほど大きい。彼が手紙の中で、又人々との会話で、作品の主張と同一のことを言ったのもその一例と言えよう。ある心理学者¹⁹の分析によると、ワイルドのこうした過度な主張は一種の狂気によるものとなっているが、その判定の正否は別として彼の主張方法が強すぎたことは確かである。ルネッサンス期の芸術家たちや、ワーズワースやコウリッジがなした詩における革命はワイルドの態度に比べれば静かでおとなしい。彼の極端性が単なるヘレニズムの美と自由の神々を追求するにとどまらず、それを飛び超える結果となったのである。ヘレニズムの美の追求とヴィクトリア朝道徳否定の終局的な姿はすべてのヴィクトリアニズムを真正面から否定することとなった。ヴィクトリア朝の世界観が偽善という言葉に集約されるとすれば、ワイルドのそれは偽悪に集約してよいだろう。前に述べたとうり、彼の心の中に美しい純粋なものが流れているにもかかわらず、極度に悪人ぶったのである。そしてこの偽悪に彼の芸術的表現の一形式を見出したと言える。男色を敢えてしたのもこれを禁じた英国の道徳から生れた法律への反撓に起因するとも考えられる。²⁰こうした極端への姿勢が彼の purple の概念にも現われているのである。この論理を進める前に少し知っておかねばならないことがあ

る。purple は何度も言ったように古代の自由奔放と華美とぜいたく、そして王位を象徴するのであるが、それは ‘Tyrian purple’ という語と関連させなければならないことである。Tyre というのは紀元前10世紀頃栄えた港町であるが、富裕と悪徳で名高かった。つまり古代都市の名称から生じた ‘Tyrian purple’ という語にはすでにデカダンスが存在していたことを忘れてはならないのである。そしてヘレニズムが悪徳に通ずることもここでよく認識しなければならない。平和と富と安定が反動と頹廃を招くのは極めて当然のことであるから。

Where has thou been since round the walls of Troy

The sons of God fought in that great emprise?

Why dost thou walk our common earth again?

Hast thou forgotten that impassioned boy,

His purple galley and his Tyrian men

And treacherous Aphrodite's mocking eyes?²¹

‘God,’ ‘Tyrian men,’ ‘Aphrodite,’ それに ‘purple,’ の四語のみでも先ほど述べたヘレニズムから頹廃の美への移行を十分連想させてくれると思う。次の例なども同様に「美」を通り越した「汚れ」を暗示していると思う。

Sing on! and I the dying boy will see

Stain with his purple blood the waxen bell

That overweighs the jacinth, and to me

The wretched Cyprian her woe will tell,

And I will kiss her mouth and streaming eyes,

And lead her to the myrtle-hidden grove where Adon lies!²²

富と安定が悪徳を呼び、健康的であったはずの美が次第に頹廢の美に変わって行く。悪の美が完成されたのはやはり『サロメ』である。

He shall be seated on his throne, He shall be clothed in scarlet
and purple....

Who is this who comes from Edom. who is this who cometh
from Bozra, whose raiment is dyed with purple, who shineth in
the beauty of his garments, who walks mighty in his greatness?

悪徳と言えば麻薬などもその代表である。麻薬は快樂(ワイルドによればそれは美である)を生み、苦痛を忘れさせてくれるが、次第にその罠となり、抜け切れなくなるという極めて悪魔的快樂を有するからである。purple は麻薬をも連想させるらしい。

They sit at ease, our Gods they sit at ease,
 Strewing with leaves of rose their scented wine,
They sleep, they sleep, beneath the rocking trees
 Where asphodel and yellow lotus twine
Mourning the old glad days before they knew
What evil things the heart of man could dream, and dreaming do
And far beneath the brazen floor they see
 Like swarming flies the crowd of little men,
The bustle of small lives, then wearily
 Back to their lotus-haunts they turn again
Kissing each other's mouths, and mix more deep
The poppy-seeded draught which brings soft purple-lidded sleep.²³

このように purple の本来の意味から次第に変化して行き、崇高な美の概念から「快楽」や「罪」を表わすようになってくる。

.... As for myself, I will go to the City of the Seven Sins,
that is but three days' journey from this place, and for my
purple they will give me pleasure, and for my pearls they will
sell me joy.²⁴

又、快楽の追求は富の場合と同様必然的に爛熟と腐敗（ディケイダンス）につながる。まさしく世紀末そのものである。ワイルドがレディングの牢獄に入った経験を生かしてつくった詩 *The Ballad of Reading Gaol* では過去において快楽におぼれた己れの姿は腐敗したものであるという意味のことを言っているが、その腐敗の様を purple で表わしている。

The warders stripped him of his clothes,
And gave him to the flies :
They mocked the swollen purple throat,
And the stark and starig eyes :
And with laughter loud they heaped the shroud
In which the convict lies.

美を求め、快楽の中に美を発見し、しかし最終的にはデカダンな生活を送り、破滅となったワイルドの変遷がこの purple の意味の変化によく象徴されているような気がする。

この色の中心となる意味は大体以上のとおりであるが、これまでの調査にはこの他に種々な要素が若干含まれていた。²⁵神秘と恐怖、²⁶絶望、運命的なことなどがそれである。しかし紙数に制限があるので省略したい。²⁷

(五) 晩年におけるワイルドの purple 観

ワイルドの purple 象徴論を調査してみようと思った段階では、この項に書くべきことは全く気付かなかった。ところが、彼の手紙を中心とした晩年（特に出獄後を指す）の著作を読みとうした時、新しい事実を発見したのである。それは、全盛時代のワイルドと入出獄後の彼は美の追求者という点においてはそれほどの変化はないにしても、人生観においてはかなりの変化を示しており、その変化がやはり purple の象徴するところにも現われていることであった。それ故、この項では入出獄後のワイルドの人生観、美観、宗教観なりを purple を通して少しばかり触れたいのである。

虚飾の美を追求した彼の全盛時代を反省の目で眺めている姿を最もよく表わしているのはやはり『獄中記』である。しかし彼は快楽と刺激を求めたことを反省しているのではなく、人生の皮層的な面の美のみを重視し、内面の美をそれほどまでに理解しなかったことを反省しているのである。ことに二年間の牢獄生活はワイルドにとって悲哀が生む人生の奥行きと云ったものを痛切に感じさせた。悲哀、苦痛、恥辱を意識するような境遇にある時、たとえわずかでも他人から示される親切や思いやりほど有難く思えるものはないだろう。事実彼はロバート・ロスなど数人の友人たちの温かい親切（それはアルフレッド・ダグラスの冷たさと非常識を考えればワイルドにとって心から感謝すべきものであった）に全盛時代には考えられないほどの感謝の心を彼は表わしている。この気持を持っただけでも彼にとっては大きな人間的進歩であった。しかしそれだけではなく、彼の美観にも多少の影響を及ぼしている。以前 *The Decay of Lying* などからでも容易に理解できるとおり、自然というものをそれほど重視していなかった。極端な芸術至上主義から芸術の方が自然を先行すると断定したのである。この論理は世紀末芸術理論の総括と言ってよいほど注目すべきものであり、それなりの真実性を持っている。しかし、こういった論理を展開せしめるに至った原因はワイルドの高慢にもあったことは確かである。自然な

人間性に欠けていたのである。二年間の獄中生活（それは自然そのものと親しむことはなかった）が一層この愛心に拍車をかけ、純朴なまでに自然の美を求めるようになった。その自然への憧れが purple にも象徴されている。

I tremble with pleasure when I think that on the very day of my leaving prison both the laburnum and the lilac will be blooming in the gardens, and that I shall see the wind stir into restless beauty the swaying gold of the one, and make the other toss the pale purple of its plumes so that all the air shall be Arabia for me.²⁹

こうして自然への愛情が次第に自然の持つ畏怖を意識させるようになり、宗教的な感覚さえ持つようになった。次の引用からでもわかるとうり、purple が享楽の象徴するものであることは変りがないにしても、その享楽を供給するところは静かで宗教的になっているのである。しかもここで云う「宗教的」とは以前のヘレニズム的自由奔放なそして必然的に非道徳なものではなく、道義的な感想さえ持てるのである。

I am going tomorrow on a pilgrimage. I always wanted to be a pilgrim, and I have decided to start early tomorrow to the shrine of Notre Dame de Liesse.... In fact the chapel of Notre Dame de Liesse is just fifty yards from the hotel! Isn't it extraordinary? I intend to start after I have had my coffee, and then to bathe. Need I say that this is a miracle? I wanted to go on a pilgrimage, and I find the little grey stone chapel of Our Lady of Joy is brought to me. It has probably been

waiting for me all these purple years of pleasure, and now it comes to meet me with Liesse as its message. I simply don't know what to say....³⁰

都会的、人工的な享楽への執着が生活そのものに深く影響を及ぼし、たとえ自然の美を詩っていたとしても、余りにも自身過剰かつ人工的表現を感じさせることが多かったワイルドであるが、この頃の彼の生活は純粋に自然に接するという傾向になっている。それは何も年令的な変化と金銭的困窮のみに起因するものではない。そしてその精神的変化、人間的成長をこの purple が象徴的に語っているのは興味深いことである。

* * * * *

世紀末はある意味では「色彩の時代」であるという発想からオスカー・ワイルドの色彩論を調査しているわけであるが、最初 yellow を研究した時、果してどれほどの価値あるものかは正直言って自信がなかった。ところがこのたび purple を調査していくにつれて、世紀末芸術を知る上には色彩の研究が極めて重要であるという確信に近いものを得た。単なる個人としての作家の研究の上に重要であるというのではなく、絵画、建築、音楽に至るまで色彩の時代であったからである。そういうわけで今後もう少しこの問題を追求していきたいと思っている。

尚、前号において「オスカー・ワイルド研究：身辺の芸術その2」を発表する予定であったが、それを変更したことを深くお詫びしたい。来号には是非実行するつもりでいる。

昭和45年3月24日記

注

1. Shoin Literary Review 第三号『オスカー・ワイルドにおける Yellow の意味』参照

2. *Let.*, P.45.
3. *Ibid.*, P.109.
4. *Ibid.*, P.274.
5. *Ibid.*, P.333.
6. 1905年5月19日版に “You had one purple moment in your life—
....” とあり, O. E. D. はこの意味を ‘Gorgeous’, ‘splendid’,
‘royal’ と意味をつけている。
7. *Let.*, P.565 にロバート・ロスの文章を引用している。
8. 『ドリアン・グレイの肖像画』の序文で作者自から, 「美とは無用のものである」と言っている。この「無用」というのはブルジョア階級, つまり金銭的・物質的な観点からのみ物事の価値を決める連中にとって「無用」と言うわけである。つまりブルジョア階級には美を解せないという軽べつなのである。ワイルドの言う卑俗は美を理解できないもの, 世間を気にして創造豊かな行動や発言の出来ないもの, ジャーナリスト的なものさしているのである。
9. Shoin Literary Review 第一号「オスカー・ワイルド研究: 同性愛とその真相」で私はこの点に言及しておいた。
10. *Ravenna*
11. *Ibid.*
12. *The Young King*
13. *The Birthday of the Infanta*
14. *The Remarkable Rocket*
15. ワイルドがアイルランドのトリニティー・カレッジに在学中指導を受けた教授で, 古典学におけるワイルドに対する影響は大きい。
16. *Rome Unvisited*
17. *Ravenna*
18. *The Critic as Artist*

19. *Degeneration* の著者 Max Nordau を指す。
20. 既出「オスカー・ワイルド研究：同性愛とその真相」でこの点についても言及した。
21. *The New Helen*
22. *The Burden of Itys*
23. *Panthea*
24. *The Teacher of Wisdom (Poems in Prose)*
25. Cf. *The Sphinx*
26. Cf. *Let.*, P. 360.
27. Cf. *Let.*, P. 471.
28. 彼は全盛時代、他人の好意や親切は自分の名声からして当然のこのように考えていたのである。
29. *Let.*, P. 509.
30. *Ibid.*, P. 582.

参 考 文 献

- Alfred Douglas : *Oscar Wilde : A Summing-up* (1940)
- St. John Ervine : *Oscar Wilde : A Present Time Appraisal* (1951)
- Frank Harris : *Oscar Wilde : His Life and Confession* (1930)
- Vyvyan Holland : *Son of Oscar Wilde* (1954)
- 〃 : *Oscar Wilde : A Pictorial Biography* (1960)
- Leonard C. Ingleby : *Oscar Wilde : Some Reminiscences* (1912)
- Vincent O'sullivan : *Aspects of Wilde* (1936)
- Hesketh Pearson : *The Life of Oscar Wilde* (1954)
- Arther Ransome : *Oscar Wilde : A Critical Study* (1921)
- Epifano San Juan, JR. : *The Art of Oscar Wilde* (1967)
- Philippe Julian : *Oscar Wilde* (1969)

Eric Lambert : *Mad with Much Heart* (1967)

Terence de Vere White : *The Parents of Oscar Wilde* (1967)